

現代ロシア語における体の意味・用法に関する
記述の再整理の試み
—体の個別的意味と時間的定位性・非定位性—

Частные значения глагольного вида и признаки временной
локализованности ситуации

阿出川 修嘉
Нобуйоси АДЭГАВА

Аннотация

В данной статье рассматривается проблема понимания и интерпретации видового значения русского глагола в тексте или высказывании. В традиционной славянской аспектологии выделяется три типа видового значения: общее (инвариантное) значение, частные значения и оттенки значения.

Общее значение представляет наиболее абстрактное, не зависящее от языкового контекста значение, которое глагол определенного вида сохраняет во всех формах и употреблениях. Частные значения, напротив, являются более конкретными и проявляются под влиянием различных условий контекста. Однако, даже при понимании частных, то есть более конкретных видовых значений каждого вида, особенно для иностранцев, остается довольно сложным определить, какую именно ситуацию говорящий стремится передать с помощью данной видовой формы в тексте или высказывании.

Чтобы правильно понять, как говорящий воспринимает и передает протекание данной ситуации во времени, предлагается использовать два языковых критерия: видо-временные формы глагола и семантический признак «временная локализованность/нелокализованность». Бондарко (1971) описывает, в каких видо-временных формах глагол может обладать

такими отличительными семантическими признаками, как и «временная локализованность». Применяя его описание к нашей концепции, мы предлагаем рассмотреть видо-временную систему, исходя из наличия или отсутствия признака «временная локализованность» в конкретной ситуации. Это, в свою очередь, поможет определить, в каких языковых условиях реализуется то или иное частное видовое значения глагола.

В результате наших наблюдений и классификации частных видовых значений выяснилось, что частные значения совершенного вида — «конкретно-фактическое значение» и «суммарное значение» — реализуются при наличии признака временной локализованности. В то же время «наглядно-примерное значение» проявляется только при отсутствии данного признака.

Что касается частных видовых значений несовершенного вида, то «конкретно-процессное значение» реализуется при наличии временной локализованности. Однако значение «простая повторяемость» может проявляться как в локализованных во времени ситуациях, так и в нелокализованных. В последнем случае такая ситуация приобретает характер узуальности или вневременности.

1. はじめに：問題提起として

現代ロシア語¹という言語体系において、動詞には、アспект（相；aspect, 露аспект）の文法的意味を表す主要な表現手段である『体（たい；露вид）』という文法的（形態論的）カテゴリーが備わっている。この「体」のカテゴリーは、主に「完了相（perfective aspect）」を表す『完了体（совершенный вид）』と、主に「未完了相（imperfective aspect）」を表す『未完了体（несовершенный вид）』という、二項の文法的対立から成っている。

Маслов（1948）、Бондарко（1971a, 1971b）などの主な研究においても踏襲されてきている、言わば「伝統的」とも言える記述のアプローチ²と

1 以下単に「ロシア語」とする。

2 Гловинская（2001）の言うところの、いわゆる『意味特徴依存アプローチ（признаковый подход）』

して、後述するように (cf. 第 2.2 節)、体のカテゴリーの意味を、その抽象度の高い (すなわち、意味解釈に際して個々の文脈への依存度が低い) 順から、『一般の意味 (общее значение)』、『個別の意味 (частное значение)』、『意味ニュアンス (оттенок значения)』という、三つのレベルに便宜的に分類した上で記述するというものがある。この枠組みに従えば、「個別の意味」は、「一般の意味」よりも抽象度が低い、すなわちより具体的な発話の場面において実現する意味という位置付けになる。

言語研究におけるこうした理論的構築物というものは、応用の場面においてどの程度有効に機能するかという観点からの検証を経た上で改めて見直すというプロセスが本来的には必要であると考えられる。この「体の意味」の理論に関して言えば、例えば、ロシア語をある程度解する (あるいはロシア語の学習・習得段階の途上にある) 非母語話者が、それぞれの体の「個別の意味」を理解していることで、現実のロシア語の発話・文において現れてくる体の意味の適切な理解に辿り着けるかという点が重要なものになるだろう。実際には、少なからぬ困難に見舞われることが少なくないように思われる。意味の理解におけるこうした困難さは、最も意味的に抽象度が高い「一般の意味」よりも、意味的により具体的なものと位置付けられる「個別の意味」のレベルにおいても、まだ意味の抽象度が高いことに起因しているのだと考えられる。

こうした状況を解消するためには、これらの「意味」を、より具象性が高いレベルにまで近付けた上で捉えることが必要であると考えられる。それを実現するためにはいくつかの方法が試みうるだろうが、そうした試みの一つとして、本稿では、「個別の意味」が動詞の体・時制形態に応じてどのように実現するかという点に改めて注目する。その際、必要に応じて「個別の意味」の解釈を助けるような意味要素 (文脈的要素) を加味した上で改めて検討し、従来の「個別の意味」の記述の再整理を試みる³。

以下、まず次節においてロシア語の動詞の体のカテゴリーをめぐる基本的な概念について確認し、続く第 3 節では、主に Рассудова (1982) と

(cf. Гловинская 2001: 6)。

3 なお、体の個別の意味の分析に関する異なるアプローチからの試みとしては、堤 (2017) が挙げられる。

Бондарко (1971b) における記述に基づいて体の個別の意味の概要を述べる。そして第4節において、改めて体の個別の意味の分類・記述についての問題点を確認した後、第5節において、形態論的基準（動詞の体・時制形態；cf. 第4.2.節）と意味論的な基準（「時間的定性」の有無；cf. 第4.3.節）に従って改めて分類を行い、動詞の体・時制形態と個別の意味の実現について改めて検討する。

2. 体のカテゴリーの意味について：伝統的な議論

2.1. 動詞の意味を構成するものと「体のペア」という概念

上述の通り、「体」のカテゴリーは、「完了体」と「不完了体」の二項の対立から成っている⁴。

伝統的な議論では、動詞の「意味」は、「語彙の意味 (лексическое значение)」と「体の意味 (видовое значение)」から成っていると便宜的に指定される。この時、ある二つの動詞が、その「語彙の意味」については共通しており、「体の意味」についてのみ異なっているというような場合、この二つの動詞は『体のペア (видовая пара)』を成しているとみなす。

例えば、читатьとпрочитатьという二つの動詞を取り上げてみると、「読む」という「語彙の意味」については両者には共通しているが、前者は不完了体動詞であり、一方後者は完了体動詞であるため、それぞれの持つ「体の意味」に関しては異なっている。このような場合、この二つの動詞は「体のペア」を成しているとみなされる⁵。

2.2. 「体の意味」の記述：一般的意味、個別の意味、意味ニュアンス

上でも述べた通り、ロシア語動詞は「体」のカテゴリーを有しており、

4 それぞれの体によって表さる（一般言語学的観点から見る場合の）アスペクトの意味については、Плунгян (2011)、阿出川 (2022) などを参照されたい。

5 形態論的観点から見ると、この「体のペア」を成す動詞は、形態論的な共通性を有するものが多い。例えば、「読む (不完了体動詞читатьと完了体動詞прочитать)」や「読み返す (不完了体動詞перечитыватьと完了体動詞перечитать)」などが挙げられる。しかしながら、語彙的意味の共通性を有するが形態論的には全く異なる動詞がペアを構成することも少数ではあるが存在する（いわゆる「補充法によるペア」と言われるもの）。例えば「(何か内容のあることを) 言う、伝える (不完了体動詞говоритьと完了体動詞сказать)」、「(～に) 成る (同становиться, 同стать)」など。

動詞の意味は「語彙の意味」と「体の意味」とで構成されている。

伝統的な体の研究においては、体のカテゴリーの文法形式が表す文法的意味（「体の意味」）を、その意味の抽象度に応じて、『一般の意味（общее значение）⁶』と『個別の意味（частное значение）』とに分けて考える。

「一般の意味」は、統語論的、意味論的文脈などの可変的要素を排除した後に残る、当該の文法形式に共有されている、最も抽象度の高い意味を指す。これは、体のカテゴリーも含めた、言語体系を構成するある文法形式がそのあらゆる用法において、共通して持っていると考えられる意味のことである（cf. Зализняк и Шмелев 2000: 18）。

それに対して、「個別の意味」とは、個々の文（発話）において、ある特定の条件において現れてくる意味を指す⁷。

そして、これらの「個別の意味」が実現する際に、その時々発話の状況に応じて、完了体、不完了体のそれぞれに付随して現れてくるのが「意味ニュアンス」である（ラスードヴァ 1975: 2）⁸。

「一般の意味」、「個別の意味」と「意味ニュアンス」の、文脈への依存度（あるいは個々の文脈的要素の影響の受けやすさ）および意味の抽象度の違いは、以下のように理解することができるだろう：

6 『不変の意味（инвариантное значение）』、『不変体（инвариант；инвариант）』とも。

7 「一般の意味」は、統語論的、意味論的文脈などの可変的要素を排除した後に残る、当該の文法形式（ここでは体のカテゴリー）に共有されている、抽象度の高い意味を指すので、より「ラング」の側に近い意味であると考えられる。それに対して、「個別の意味」は、より「パロール」の側に近い意味であると捉えることもできるだろう。

8 ラスードヴァ（1975）では、完了体には、「結果達成」、「結果残存」、「結果の評価」、「期待された動作」、「可能・不可能」、「危惧の念」、「潜在的可能性を踏まえた一般化」といったものが、また不完了体には「動作の名指し」、「動作事実の有無の確認」、「経験」、「回想の過去」、「結果の消滅」、「未然の動作」、「結果達成を希望しないこと」、「禁止」、「不必要」、「否定的意図」、「着手」、「様態」、「努力」、「所要時間」、「予定」、「同時性」、「規則的反復の可能性を踏まえた一般化」といった意味ニュアンスが挙げられている（cf. ラスードヴァ 1975: 2；なお、当該部分の執筆は同書の翻訳・編集を担当した磯谷孝氏によるものと思われる）。

表 1：体の意味、文脈への依存度と意味の抽象度

	発話時の文脈への依存度	意味の抽象度
一般的意味	低い	高い
個別の意味	↓	↓
意味ニュアンス	高い	低い

なお、この最も抽象度の高い、「一般的意味」（すなわち、体のカテゴリーの文法的意味）をどのように規定するかについては、言語の意味の記述のアプローチとも密接に関わる問題であり、これまで多くの提案がなされてきているものの、最終的な解決には至っておらず、未だ議論の決着を見ていない⁹。

本稿では、これらの「意味」のうち、「個別の意味」を対象として以下取り上げる。

3. 体の個別の意味

3.1. 本節の概要

ここまで、体という文法的カテゴリーの表す意味の記述について見た。本節では、先行研究において記述されている体の個別の意味について確認する。

完了体、不完了体のそれぞれの個別の意味については、これまで様々な研究者が分類を行ない、リストの作成を試みているが、本節では主に Рассудова (1982) による分類に応じて個別の意味を提示し、適宜Бондарко (1971b) におけるそれぞれの意味についての記述からも補足しつつ、その概要を確認する。

Рассудова (1982) は、著者がロシア語教育の分野を専門領域としてい

9 この点については、本稿の目的から大きく逸れるため、ここでは詳しくは言及しない。なお、これまで提案されてきたものとしては、動作の『終了性（законченность действия；ある動作が終了点にまで到達したことを表す）』、『限界性（предельность действия；ある動作が限界に到達したことを表す）』、『結果性（результативность действия；ある動作の結果を表す）』、『点状性（точечность действия；ある動作の開始と終了が点のように一致していることを表す）』、『全一性（целостность действия；ある動作の開始、中盤、終了のそれぞれが一体のものとしてみなされていることを表す）』などが挙げられるが、いずれも反駁を受けており（cf. Гловинская 2001: 6-14）最終的な解とはなっていない。

ることから、体のカテゴリーの意味と用法をどのように外国人ロシア語学習者に理解・習得させるか、という視点でまとめられている。理論的な枠組みとしては、Маслов (1948, 2004 など)、またБондарко (1971b)、Forsyth (1970)、Comrie (1976) などに拠っている部分が大いと考えられる (cf. Рассудова 1982: 3) が、体のカテゴリーの持つ多様な意味と用法に関するその記述は、とりわけ非母語話者にとっては貴重である。

Бондаркоによる研究 (1971b) は、Маслов (1948) に始まる一連の研究を発展させる形で、体のカテゴリーの表す意味の体系的な記述を目指すという、著者の一連の研究活動のちょうど中間期あたりに位置するものである。この著作の前後から、氏の著作の主たるテーマは機能文法の理論へと本格的にシフトしていると考えられることから、このБондарко (1971b) が、氏の一連のロシア語アспект研究において、ある種の区切りとしての役割を果たしているとも見ていいだろう。

3.2. 完了体の個別的意味

完了体の個別的意味については、Рассудова (1982: 10)、Бондарко (1971b: 22-24) 共に、そのリストに大きな差異はなく、実質的に以下の三つの意味を挙げている¹⁰。

- ① 具体的事実の意味 (конкретно-фактическое значение)
- ② 一括化の意味 (суммарное значение)
- ③ 例示の意味 (наглядно-примерное значение)

それぞれに対応する例文を見ながら、これらの意味について見ていくことにしよう¹¹。

まず、上記①「具体的事実の意味」は、「具体的な¹²、単一の事実 (конкретный единичный факт)」を表す (Бондарко 1971b: 22)。

10 Бондарко (1971b) では、これらに加えて『潜在的動作の意味 (потенциальное значение)』が挙げられている。

11 例文はそれぞれ当該文献から引用したものである。その際当該文献内の記述に際して例文が複数上げられている場合には、筆者の判断で取捨選択している。

12 ここでの「具体的」という語の意味するところとしては、「時間軸上の特定の位置に属する (配される)」ということが念頭に置かれていると考えてよいだろう。

- (1) Он повторил [PFV-PST-M]¹³ мне свой вопрос. (Рассудова 1982: 10)
彼は私に質問を繰り返して言いました。

次に、上記②「一括化の意味」は、以下のような例で見ることができる。

- (2) Он несколько раз повторил [PFV-PST-M] свой вопрос. (Рассудова 1982: 10)
彼は続けて何度か自らの質問を繰り返しました。

この意味が現れる場合には、「два раза (二回)」、「трижды (三回)」、「несколько раз (何度か)」といった「回数」を表す指標を伴う (Бондарко 1971b: 24)。

次に上記③「例示の意味」について確認しよう。

- (3) Если вы не поймете мое объяснение, я всегда могу повторить [PFV-INF] его вам. Я всегда повторю [PFV-PRS/FUT-1SG] его вам.

(Рассудова 1982: 10)

説明が分からないようでしたら、いつでも繰り返してあげますよ。いつでも繰り返せます。

- (4) Иногда весной бывает так: налетит [PFV-PRS/FUT-3SG] буря, погуляет [PFV-PRS/FUT-3SG] часа два - три и так же неожиданно затихнет [PFV-PRS/FUT-3SG], как началась.

(Бондарко 1971b: 22)

春にはこういうことが時折あるものだ。嵐が巻き起こり、二三時間にわたってそれは駆け巡ったかと思うと、巻き起こった時と同じように、不意に止んでしまったりする。

この意味では、反復する動作が表されるが、その際、反復する複数の

13 以下本稿のロシア語例文内では、議論となっている動詞には下線を施し、その後の角括弧内に動詞の形態論的情報に関する簡易的なグロスを付する。文法情報はスモールキャピタルで示し、それぞれの略語が表す文法情報は以下の通り：

IPFV = 不完了体, PFV = 完了体, PRS = 現在形, PST = 過去形, FUT = 未来形, PRS/FUT = 現在・未来形, IMP = 命令形, 1 ~ 3 = 1 ~ 3 人称, SG = 単数, PL = 複数, M = 男性形, N = 中性形, F = 女性形

動作のうち一つを、その動作の具体的なイメージを与えるための「例」として取り上げることで表現する (Бондарко 1971b: 22)。

3.3. 不完了体の個別の意味

不完了体の個別の意味については、Рассудова (1982: 10)¹⁴における記述と、Бондарко (1971b: 24-36)における記述とでは、その内容の細分化の度合いが異なっている¹⁵。

両者に共通しているのは、以下の三つの意味である。

- ① 具体的過程の意味 (конкретно-процессное действие)
- ② 制限のない多回性の意味 (неограниченно-кратное действие)
- ③ 一般的事実の意味 (общефактическое значение)¹⁶

①「具体的過程の意味」では、具体的な、つまり時間軸に一定の位置を占め、且つ動作がその完遂に向かって進行している過程にあるものとして動作が提示される (Бондарко 1971b: 24)。

- (5) Молодая женщина сидела [IPFV-PST-F] у окна вагона и читала [IPFV-PST-F].
(Рассудова 1982: 10)

若い女性が車両の窓際に座り、読み物をしていた。

また、②「制限のない多回性の意味」は、以下のような例で見ることができる。これは無制限に反復する動作を表す (Бондарко 1971b: 27)：

- (6) Иногда я перечитывал [IPFV-PST-M] писателей, которых особенно любил.

14 この著作の初版となるРассудова (1968)においては、用いられている術語が若干異なっていることも指摘しておくべきであろう。それぞれ①が『動作の過程の意味 (значение процесса действия)』、②が『反復性 (значение повторяемости)』となっている。これは、68年の初版の出版後に、Бондарко (1971b) が出版されたため、82年の改訂版ではそこでの成果を踏まえ、且つ取り込もうとしたためと思われる。

15 Бондарко (1971b) では、更に『恒常的・不断の動作の意味 (постоянно-непрерывное значение)』、『潜在的・性質的動作の意味 (потенциально-качественное значение)』、『制限のある多回性 (ограниченно-кратное значение)』の意味が挙げられている。

16 Бондарко (1971b) では、「обобщенно-фактическое значение」という名称が採用されている。

(Рассудова 1982: 10)

時々私は、特に気に入っている作家の作品を読み返していた。

下の例に見られる③「一般的事実の意味」は、当該動作があるのか無いのか（あったのか無かったのか）を表すというのがその基本的な意味である（Бондарко 1971b: 29）：

- (7) Вы читали [IPFV-PST-PL] эту повесть? В каком журнале вы ее читали [IPFV-PST-PL]? (Рассудова 1982: 10)

この小説をお読みになりましたか? どの雑誌で読まれましたか?

4. 個別的意味の再整理に向けて：形態論的基準と意味論的基準

4.1. 個別的意味の問題点と本稿での試み

前節までで見てきたように、完了体・不完了体のそれぞれの個別的意味は、従来このように分類・整理されている。しかしながら、「一般の意味」よりもより抽象度が低いと位置付けられるはずの、これらの「個別的意味」のレベルの知識があったとしても、実際の発話や文の意味を理解する際に、この体の意味が個別的意味のうちのどれに当たるのかが判断しづらいという点は完全には解消されないように思われる。例えば、以下のような例を見てみよう。

- (8) Он поднимет [PFV-PRS/FUT-3SG] эту штангу.

彼はこのバーベルを持ち上げます。

- (9) Я могу повторить [PFV-INF] вам объяснение.

私はあなたに説明を繰り返してあげられますよ。

- (10) Еще раз повторю [PFV-PRS/FUT-1SG] Вам, что уже говорил: будем трудиться, не рассчитывая на зримые результаты.

(Зоя Масленикова. «Жизнь отца Александра Меня», 1992; «НКРЯ»¹⁷)

既に言ったことをもう一度繰り返します。目に見える成果を当てにし

17 この付記は、当該の用例がロシア語ナショナルコーパス（Национальный корпус русского языка）から得られた用例であることを示す。

ないで、努力しましょう。

これらの文に触れた際に、当該動詞の体のカテゴリーによって表されている意味はどのようなものであるか（ここでは、「具体的事実の意味」なのか「例示の意味」なのか）は理解・解釈するには相応の難しさがあるだろう。

一方で、以下のような例であれば、比較的理解・解釈は可能であるようにも思われる。

- (11) Только настоящая женщина может поднять [PFV-INF] 120-килограммовую штангу, не смазав губную помаду.

(Анастасия Чеховская. Самая сильная бабушка // «Русский репортер»,
№ 25 (104), 02-09 июля 2009; «НКРЯ»)

本当の女だけが口紅を塗らずに 120 キロのバーベルを持ち上げることができるのだ。

- (12) Я всегда могу повторить [PFV-INF] вам объяснение.

私はいつでもあなたに説明を繰り返してあげられますよ。【例3の再掲】

- (13) Только любовью можно поднять [PFV-INF] любую тяжесть и выполнить [PFV-INF] любую задачу, и притом с радостью, и притом непосильную задачу.

(Б. Н. Абрамов. «Грани Агни Йоги», 1952; «НКРЯ»)
愛によってのみどんな重荷も持ち上げることができ、どんな課題も成し遂げることができる。その上喜びとともに、しかも手に負えないような課題をもだ。

- (14) Вот, Сергей Михайлович, только что я говорил Геннадию Дмитриевичу, теперь повторю [PFV-PRS/FUT-1SG] вам.

(С. М. Голицын . «Записки беспогонника», 1946-1976; «НКРЯ»)
では、セルゲイ・ミハイロヴィッチ、ゲンナーダー・ドミートリエヴィチに言ったことだけあなたに繰り返して言います。

- (15) Хорошо, я повторю [PFV-PRS/FUT-1SG] вам свои басни, — после долгой паузы, с тихим бешенством сказал он.

(Константин Симонов. «Живые и мертвые», 1955-1959; «НКРЯ»)

わかりました。私の話を繰り返してあげましょう。——長い沈黙の後、静かな怒りをたたえて彼はこう言った。

こうした理解・解釈の困難度の違いには、何らかの意味的な（あるいは「文脈的」な）要素が関わっているように思われるが、この意味的要素を加味した上で、個別の意味を整理してみるとどのような理解が可能になるであろうか。これはすなわち、個別の意味を、より意味の抽象度の低い（＝具体性の高い）レベルで捉え直すということになる。それを想定してみると下表のように示することができるだろう。

表 2：体の意味、文脈への依存度と意味の抽象度（修正版）

	発話時の文脈への依存度	意味の抽象度
一般的意味	低い	高い
個別の意味 1	やや低い	やや高い
個別の意味 2	やや高い	やや低い
意味ニュアンス	高い	低い

従来の議論での「個別の意味」は、上表中では「個別の意味 1」に該当するものと捉え、それよりも更に文脈の要素を組み入れ、意味の抽象度をより低めたものとして、「個別の意味 2」というレベルを想定すると、個別の意味の理解がより容易になるのではないだろうか。

ここで導入する文脈の要素としては、まず、体・時制形態という動詞の形態論的基準による分類を行い（cf. 第 4.2. 節）、次に「時間的定位性」という意味論的基準による分類を導入する（cf. 第 4.3. 節）。

4.2. 形態論的基準：ロシア語動詞の体・時制形態

本節では、ロシア語動詞の形態論的特徴（体・時制形態）について、「書く」という語彙の意味を有する動詞писать（不完了体動詞）とнаписать（完了体動詞）というペアを成す動詞（cf. 第 2.1. 節）を例に取り確認していく。

上述の通り、ロシア語動詞はほぼ全ての動詞が「体」の形態論的カテゴリーを有し、完了体動詞と不完了体動詞とに分類される。ロシア語においては、時制のカテゴリーは「過去」、「現在」、「未来」の三つが想定

されており、それぞれの時制を表現する時制の形態は下表のようにまとめることができる（ロシア語の動詞はその主語の人称、数、また性にに応じて語形変化するが、下表中、主語として想定されているのは、人称としては3人称、数については単数、文法性としては男性の主語である）。

表 3：ロシア語動詞の体・時制（時制に応じた分類）

時制 \ 体	不完了体	完了体
過去時制	писал	написал
現在時制	пишет	—
未来時制	будет писать	напишет

過去時制は、不完了体動詞писалと完了体動詞написалという形態（過去形）によってそれぞれ表される。現在時制は、不完了体動詞пишетのみが表すことができる。未来時制を表す場合には、不完了体動詞については、不定形（不定詞）がбытьの変化形と結合することによって（ここではбудет писать；いわゆる「合成未来形」）、また完了体動詞については人称と数に応じた変化形（ここではнапишет；同「単純未来形」）によって表される。

ここで、時制の意味と動詞の形態面との関係に注目してみると、まず不完了体・完了体ともに過去形が表す時制は過去時制である。人称・数に応じて語形変化する形態（「非過去形」とも言うべきもの）が表す時制は、不完了体の場合には現在時制が表されるのに対して、完了体の場合には未来時制が表される。不完了体の合成形が表す時制は未来時制のみとなっている。形態面に注目してまとめてみると以下のように表せるだろう。

表 4：ロシア語動詞の体・時制（形態に応じた分類）

時制形態 \ 体	不完了体	完了体
過去形	писал	написал
非過去形	пишет	напишет
合成未来形	будет писать	—

形態とそれぞれの表す時制とを考慮すると、以下のように整理、提示することも可能であろう。

表 5：ロシア語動詞の体・時制

時制 \ 体	不完了体	完了体	体 \ 時制形態
過去時制	писал	написал	過去形
現在時制	пишет	—	非過去形
未来時制	—	напишет	
	будет писать	—	合成未来形

4.3. 意味論の基準：時間的定位性・非定位性という意味特徴

4.3.1. 概要：時間的定位性・非定位性

Бондарко (1999) によれば、「動作」(あるいは「状況」¹⁸⁾) には、『時間的定位性 (временная локализованность)』と『時間的非定位性 (временная нелокализованность)』という二つの意味的対立があるという (cf. Бондарко 1999: 168)。それらは次のような意味要素の対立で表される。

- ① 当該動作が具体的か否か (「具体性」)
- ② 当該動作が時間軸上で占める位置が定的か否か (「定性」)
- ③ 当該動作がある一時点 (あるいは一期間) に帰属しているか否か

「時間的定位性」を有している動作は、具体的であり、時間軸上で占める位置が定まっており、ある一時点 (あるいは一期間) に帰属しているものである。それに対して、「時間的定義性」を有していない (= 「時間的非定位性」を有している) 動作は、この三つの意味要素のいずれも有していないものである。

これらの意味特徴の表現を中心的に担っているのは、動詞を中心とした述語 (述部) であるが、この特徴を考えるには、ある発話全体を考慮する必要がある。つまり、述語だけでなく、主体、客体、場合によって

18 以下単に「動作」という語で代表させる。

は状況語の要素によってもその時間的定性の有無が定められるからである (cf. Бондарко 1999: 169)。

4.3.2. 時間的非定性の下位区分

また、「時間的非定性」は、さらに次の3つのタイプに下位区分される (Бондарко 1999: 181-183)。

- (ア) 『単純反復性 (простая повторяемость)』
- (イ) 『習慣性 (узуальность)』
- (ウ) 『時間的普遍性 (временная обобщенность)』

上記 (ア) の「単純反復性」は、具体的なエピソードにおける、習慣的でない、際限をもたない反復性をあらわす。この「単純反復性」は、直接観察できること、あるいは記憶にその動作を呼び起こすことができるということと結びついている (Бондарко 1999: 181)。

- (16) Иногда Татьяна Петровна брала [IPFV-PST-F] ее ¹⁹, рассматривала [IPFV-PST-F] и, нахмутив тонкие брови, задумывалась [IPFV-PST-F].

(Константин Паустовский, «Снег», 1943)

時折、タチヤーナ・ペトロブナはそれを手にとり、じっと見てみて
は、細い眉をひそめて物思いにふけるのであった。

このような反復性というのは、具体的なエピソードや具体的に観察できる反復性の範囲 (= 上の「単純反復性」) から離れた、その反復するもの (定期的なもの、非定期的なものを問わず) への、何らかの『評定 (оценка)』と結びつく。これが、上記 (イ) の「習慣性」である²⁰。「習慣性」の特徴は、同様の反復の見通し (つまり実際の反復と、まだなされていないがこれから行われる可能性がある反復) を前提としており、そのために「典型性 (типичность)」というものと結びつく。このような「習慣性」

19 前後の文脈から、当該代名詞は、ここでは「カード (карточка)」を指している。

20 Бондарко (1999) では、『通常性 (обычность)』という術語も用いられているが、ここではより理解しやすいであろう「習慣性」を採用している。

の基礎となっているのは、話者、あるいは話者によって話題に出された人々の持つ経験が一般化されていることである (cf. Бондарко 1999: 181-182)。

- (17) Снег в Москве к концу марта остается [IPFV-PRS-3SG] только в некоторых дворах, а на теплом асфальте его уже давно нет.

(Константин Паустовский, «Грач в троллейбусе», 1953)

三月の終わりに近いモスクワの雪はいくつかの中庭だけには残るのだが、暖かいアスファルトの上にはもう長いこと見られないのである。

上記 (ウ) の「時間的普遍性²¹」は、俚言 (ことわざ) や一般的な法則などを述べる際にあらわれる (下例)。

- (18) Два медведя в одной берлоге не уживутся [PFV-PRS/FUT-3PL].

二匹のクマはひとつの巣穴では睦まじく暮らせない。(「両雄並び立たず。」)

この性質を持つ場合には、その動作はもっとも一般化されたかたちで提示される (Бондарко 1999: 182)。

4.3.3. まとめ：時間的定性・非定性

本節では、時間的定性・非定性という意味要素について見てきた。

動作 (状況) の時間的定性の有無とその下位区分は下表のようにまとめることができるだろう。

21 これは、『金言的叙述性 (гномичность)』、『超時間性 (вневременность)』、『全時間性 (всевременность)』といった術語で表される場合もあるが、ここでは「時間的普遍性」という術語を当座採用している。

表 6：時間的・非時間性とその下位区分

時間的・非時間性	下位区分
定	—
非定	単純反復性
	習慣性
	時間的普遍性

5. 個別の意味の再整理の試み

5.1. 概要

ここまで、従来の体の個別の意味の分類について確認し（cf. 第 3 節）、動詞の体・時制形態という形態論的側面（cf. 第 4.2. 節）と、時間的・非時間性という意味論的側面について見てきた（cf. 第 4.3. 節）。

以下では、上で見た体・時制形態という形態論的基準を踏まえつつ、時間的・非時間性の有無という基準を考慮に入れた上で、従来の体の個別の意味について、完了体、不完了体それぞれの記述の再整理を試みることにしよう。

5.2. 体・時制形態と時間的・非時間性

本節では、Бондарко（1971a）における記述に従い、体・時制形態と時間的・非時間性の相関についての整理を試みる。

Бондарко（1971a）では、体・時制形態の差異の記述にあたり、以下の五つの特徴を示差的特徴として定め、これらの特徴の有無の組み合わせによる分類を試みている（cf. Бондарко 1971a: 78-80）。

- イ）『先行性（признак предшествования）』
- ロ）『同時性（признак одновременности）』
- ハ）『後続性（признак следования）』
- ニ）『時間的・非時間性（признак временной локализованности действия）』
- ホ）『パーフェクト性（признак перфектности）』

時制の示差的特徴として、イ）の「先行性」、ロ）の「同時性」、及びハ）

の「後続性」という、2つ以上の動作（ないしは状況）間の時間的關係に関わるものが挙げられている。また、上述の「時間的定性性」（上の二）、及び「パーフェクト性」（同ホ）²²も示差的特徴として設定されている。

Бондарко (1971a) では、これらの特徴と、それぞれの特徴が実現する体・時制形態との關係を以下のような表の形にまとめられている (cf. Бондарко 1971a: 80)。

下表中、「+」で示されている場合には、その意味特徴が当該形式によって表現されることを示し、「-」の場合には表現されないことを示している。また、「+/-」で示されている場合には、表現されないが、一方でそれが除外もされないことを示す²³。「(+)/-」の場合には、その特徴は基本的には表現されないが、表現されるためには制限があることを示し、逆に「+/- (-)」の場合には、その特徴が基本的には表現されるものの、表現されないためには制限があることを示している。

表 7：体・時制形態と示差的特徴（Бондарко1971a における表に基づく）

時制	体・時制形態	示差の意味特徴				
		先行性	同時性	後続性	時間的定性性	パーフェクト性
過去	不完・過去	+	-	-	+/-	(+)/-
	完・過去	+	-	-	+/- (-) ²⁴	+/-
現在	不完・非過去 ²⁵	-	+	-	+/-	-
未来	完・非過去 ²⁶	-	(+)/-	+/- (-)	+/- (-)	-
	不完・合成 ²⁷	-	-	+	+/-	-

22 「パーフェクト性」については、Бондарко (ed., 1987) における記述を参照されたい (cf. Бондарко ed., 1987: 195-209; 当該部分の執筆者はМаслов)。

23 いわゆる二項が「欠如的対立 (привативная оппозиция; privative opposition)」を成している場合を表す。

24 Бондарко (1971a) では、この箇所の記述は「+」とのみ記されているが、後で見ると、厳密に考えればこの形態（完了体・過去形）であっても時間的定性性を持たない状況を描写することは可能である。そのため、ここでは本稿筆者の判断で、原典の表に修正を加えることにした。

25 Бондарко (1971a) においては、「現在 (настоящее)」という表記が採用されているが、ここでは上で見た (cf. 4.2.) 本稿での分類に応じて「非過去」という表記を採用している。

26 前の注と同様、Бондарко (1971a) においては、「現在・未来 (настоящее - будущее)」という表記が採用されているが、ここでは上で見た (cf. 4.2.) 本稿での分類に応じて「非過去」という表記を採用している。

27 同様に、Бондарко (1971a) においては、「未来 (будущее)」という表記が採用されているが、ここでは上で見た (cf. 4.2.) 本稿での分類に応じて「合成」という表記を採用している。

これらの諸特徴のうち、本稿で特に取り上げる時間的位置性の意味特徴と、それぞれの体・時制形態との相関だけを取り出すと下表のように表すことができる。

表 8：体・時制形態と時間的位置性の有無

時制	体・時制形態	時間的位置性
過去	不完・過去	+ / -
	完・過去	+ / (-)
現在	不完・非過去	+ / -
未来	完・非過去	+ / (-)
	不完・合成	+ / -

次節以降で、上表で示されている相関関係に基づき、完了体及び不完了体のそれぞれの個別の意味の整理を試みる。

5.3. 時制、時間的位置性と個別の意味：完了体

5.3.1. 概要

まず完了体について、時制形態と時間的位置性の有無に応じた分類を試みた上で個別の意味について検討してみよう。

完了体は基本的に、過去時制、未来時制の双方において、時間的位置性を持つ動作・状況を表す。

表 9：完了体の時制形態と時間的位置性の有無

時制	例	時間的位置性
過去	написал	+ / (-)
未来	напишет	+ / (-)

5.3.2. 過去時制

まず過去時制の場合から見ていくことにしよう。

(19) Вчера я прочитал [PFV-PST-M] этот роман.

昨日私はその小説を読み終えた。

- (20) Он несколько раз повторил [PFV-PST-M] свой вопрос. 【例2の再掲】
彼は続けて何度か自らの質問を繰り返しました。

上例(19)は、個別的意味のうち「具体的事実の意味」を表しており、例(20)は「一括化の意味」を表している。

しかしながら、下例のように、いわゆる「俚諺」などに見られるような特殊な文脈においては、過去時制の形態が用いられていても時間的定位性を持たない状況を表しうる。

- (21) Что с возу упало [PFV-PST-N], то пропало [PFV-PST-N].
お盆からこぼれ落ちてしまったものは台無しだ。(「覆水盆に返らず。」)

これは「例示の意味」であると解釈できるが、Бондарко (1971b)においても過去時制において(まれではあるが)この意味が現れることが指摘されている(cf. Бондарко 1971b: 22)。

5.3.3. 未来時制

未来時制の場合で時間的定位性を有する動作を表す例としては以下のようなものがある(例22は「具体的事実の意味」、同23は「一括化の意味」)。

- (22) Он напишет [PFV-PRS/FUT-3SG] письмо.
彼は手紙を書き上げるだろう。
- (23) Он прыгнет [PFV-PRS/FUT-3SG] три раза. (Рассудова 1982: 75)
彼は立て続けに3回ジャンプするだろう。

一方、未来時制で用いられる場合に、時間的定位性を持たない動作を表す例としては、個別的意味のうち、「例示の意味」を表す場合が該当するだろう(下例24、25)。

- (24) Иногда весной бывает так: налетит [PFV-PRS/FUT-3SG] буря, погуляет [PFV-PRS/FUT-3SG] часа два-три и так же неожиданно затихнет [PFV-PRS/FUT-3SG], как началась.

春にはこういうことが時折あるものだ。嵐が巻き起こり、二三時間にわたってそれは駆け巡ったかと思うと、巻き起こった時と同じように、不意に止んでしまったりする。【例4の再掲】

(25) Два медведя в одной берлоге не уживутся [PFV-PRS/FUT-3PL].

【例18の再掲】

二匹のクマはひとつの巣穴では睦まじく暮らせない。（「両雄並び立たず。」）

この場合には、時間的非定位性を有していることを示す指標（上例の場合には、「Иногда бывает так: ...」がそれに該当するだろう）が文脈内に必ず提示されていることで、適切な意味の理解・解釈が可能になる。

5.4. 時制、時間的定位性と個別的意味：不完了体

5.4.1. 概要

次に不完了体の個別的意味について、同様に時制形態と時間的定位性の有無に応じた分類を試みた上で個別的意味について検討してみよう。

不完了体はどの時制形態においても、時間的定位性を持つ動作・状況を表す場合と持たない動作・状況を表す場合とがありうる。以下でそれぞれ見ていくことにしよう。

表 10：不完了体の時制形態と時間的定位性の有無

時制	例	時間的定位性
過去	писал	+ / —
現在	пишет	+ / —
未来	будет писать	+ / —

5.4.2. 過去時制

まず過去時制について、時間的定位性を有する動作の例から見ていくことにしよう。

(26) Вчера вечером я читал [IPFV-PST-SG-M] этот роман.

昨日の晩私はこの小説を読んでいた。

上例 (26) は、時間的的定位性を有する動作を表している（「具体的過程の意味」）。

それに対して、例 (27) 及び (28) は、時間的的定位性を持たない動作を表している（それぞれ「反復性」、「習慣性」）。

(27) Мы несколько раз тщательно проверяли [IPFV-PST-PL] результаты.

(Рассудова 1982: 32)

我々は何度も念入りにこの結果を調べていた。

(28) В то время каждое утро она читала [IPFV-PST-SG-F] газету.

その当時毎朝彼女は新聞を読んでいました。

5.4.3. 現在時制

次に現在時制の例を見ていくことにしよう。

(29) Сейчас он пишет [IPFV-PRS-3SG] письмо.

今彼は（その）手紙を読んでいる。

上例 (29) は、時間的的定位性を有する動作を表している（「具体的過程の意味」）。

(30) Каждое утро она читает [IPFV-PRS-3SG] газету.

毎朝彼女は新聞を読んでいる。

(31) Я тебе всегда пишу [IPFV-PRS-1SG] именно в это время.

僕はいつも君にまさにこの時間に手紙を書くことにしている。

上例 (30)、(31) は、時間的的定位性を持たない状況を示していると考えられ、それぞれ「単純反復性」（後者は更に言えば「習慣性」）を示していると考えられる。

一方、下例 (32) は、いわゆる「普遍的真理」について述べるタイプの用法である（「時間的普遍性」）。

- (32) Птица летает [IPFV-PRS-3SG], а рыба плавает [IPFV-PRS-3SG].
鳥は飛び、魚は泳ぐ (ものだ)。

5.4.4. 未来時制

未来時制について見ていこう。

- (33) Когда я буду рассказывать [IPFV-FUT-1SG] о поездке, то покажу слайды, которые мы сделали. (Рассудова 1982: 74)
旅行について話している最中には、私たちが作ったスライドをお見せします。

上例 (33) は、時間的定位性を有している例である (「具体的過程の意味」)。

下例 (34) 及び (35) は、時間的定位性を有していない動作の例だが、上述の現在時制の場合と同様に、それぞれ単純反復性 (また習慣性) を有すると考えてよいだろう。

- (34) Он будет прыгать [IPFV-FUT-3SG] три раза. (Рассудова 1982: 75)
彼は 3 回ジャンプするだろう。
- (35) Когда он устроится на работу и начнет получать зарплату, он будет каждый день читать [IPFV-FUT-3SG] новости и собирать [IPFV-FUT-3SG] информацию, чтобы понимать, что происходит в мире.
彼が仕事に就いて給料をもらうようになれば、世界で何が起きているかを理解するために毎日ニュースを読んで情報を集めるようになるだろう。

6. 本稿における結論

本稿では、「一般的意味」よりも具体的な意味であると位置付けられている、「個別的意味」の解釈と理解をより容易にするために、さらにいくつかの「文脈」的な要素を導入し、再度検討・整理することを試みた。今回採用した「文脈」的要素として、動詞の体・時制形態という形態論的基準と、時間的定位性・非定位性という意味論的基準とを加味した上

で再度の分類を試みた。

まず完了体は、基本的に時間的定位性を有する動作を表すために用いられるが、特定の条件が整うと時間的非定位性を有する動作を表すこともできる。

それぞれの時制と個別的意味、さらに時間的定位性の有無の関係をまとめると、下表のように示すことができる²⁸。

表 11：時制の別、時間的定位性と完了体の個別的意味

時制	個別的意味	時間的定位性		例
		+ / -	下位区分	
過去	具体的事実	+	(なし)	Он <u>написал</u> письмо.
	一括化			Он <u>повторил</u> вопрос два раза подряд.
	例示的	(-)	普遍性	Что с вoзy <u>упало</u> , то <u>пропало</u> .
未来	具体的事実	+	(なし)	Он <u>напишет</u> письмо.
	一括化			Он <u>прыгнет</u> три раза.
	例示的	(-)	普遍性	Иногда бывает так: <u>налетит</u> буря... Два медведя в одной берлоге не <u>уживутся</u> .

一方、不完了体の場合には、いずれの時制形態で用いられた場合でも、時間的定位性を有する動作と有していない動作を表すことができるが、時間的定位性を有していない動作のうち、「時間的普遍性」を表すことができるのは現在時制の場合のみである。

それぞれの時制と個別的意味、さらに時間的定位性の有無の関係をまとめると、下表のように示すことができる。

28 下表 11 及び 12 中、紙幅の都合により「時間的普遍性」を「普遍性」と略記している。

表 12：時制の別、時間的・非時間的・非定位性と完了体の個別の意味

時制	個別の意味	時間的・非時間的・非定位性		例
		+ / -	下位区分	
過去	具体的過程	+	(なし)	Он <u>писал</u> письмо.
	無制限多回	-	反復性	Мы несколько раз тщательно <u>проверяли</u> результаты.
			習慣性	В то время каждое утро она <u>читала</u> газету.
現在	具体的過程	+	(なし)	Он <u>пишет</u> письмо .
	無制限多回	-	反復性	Я тебе всегда <u>пишу</u> именно в это время.
			習慣性	Каждое утро она <u>читает</u> газету.
			普遍性	Птица <u>летает</u> , а рыба <u>плавает</u> .
未来	具体的過程	+	(なし)	Когда я <u>буду</u> рассказывать о поездке, ...
	無制限多回	-	反復性	Теперь каждую неделю <u>буду</u> писать тебе... Он <u>будет</u> прыгать три раза.
			習慣性	Когда он устроится на работу, он <u>будет</u> каждый день <u>читать</u> новости и...

7. 今後の課題

ここまで、従来の枠組みにおける「個別の意味」の再整理を試みた。このような本稿の試みは、これまでの体の意味記述の試みが元来目指していた、抽象的な文法的意味を抽出するという理論上の目標からは逆行するものである。しかしながら、一方で、体の個別の意味の記述の充実という課題はこれまでも指摘されていることでもある。言語体系の分析における「ラング」と「パロール」の関係がそうであったように、「体」の意味を検討する際にも、「パロール」的である個別の意味の十全な記述なくしては、「ラング」としての文法的意味の記述は得られないであろうことは想像がつく。

ここでは、本稿で扱いきれなかったいくつかの点について確認しておこう。

まず動詞の諸形態について、本稿では不定形（不定詞）の場合の個別の意味に関して扱い切れていない。ロシア語の体のカテゴリーの形態的対立は、動詞が不定形の場合においても保持されることが特徴的だが、

この不定形という形態は、その統語環境・意味論的条件などに応じて、時間的定位性を有する動作を表す場合にも、有していない動作を表す場合にも用いられうる。そのため不定形における体のカテゴリーが表す意味（及びそれに付随してくる意味ニュアンス）は、極めて多様であり、それらをどのように記述することが可能かという点は別途更なる分析が求められるだろう。

また、体の個別の意味について言えば、不完了体の「一般的事実の意味」については本稿では適切な特徴付けができていない。例えば、Рассудова (1982) では、以下のような例が不完了体の「一般的事実の意味」の例として挙げられている。

- (36) А давно строили [IPFV-PST-PL] это здание? (Рассудова 1982: 57)
 だいぶ前にこの建物は建てられたのですか？
- (37) — Я показал Ивану Петровичу свою модель.
 — Когда ты показывал [IPFV-PST-SG-M]? (Рассудова 1982: 59)
 —僕はイワン・ペトロヴィチに自分の模型を見せたよ。
 —いつ見せたんだい？
- (38) Вы будете устраивать [IPFV-FUT-2PL] в этом месяце вечер встречи с поэтами? (Рассудова 1982: 75)
 あなたは今月詩人たちとの会合を催しますか？

これらは、過去ないしは未来の一時点で進行している動作を表すもの（＝「具体的過程の意味」）でもなく、反復性を有する動作を表すもの（＝単純反復の意味）でもない。このような例に見られる不完了体の「一般的事実の意味」について、どのように特徴付けるべきであろうか。時間的定位性について無標項（すなわち、それ自体では積極的に当該特徴について表示するものではなく、「±」で示される）とするのが適当なのか、あるいは「+／－」という特徴付けが適当か、といった点については今後精査が必要となってくるだろう。先に阿出川（2022）でも指摘されている通り、不完了体の「一般的事実の意味」の特殊性については改めて考察が加えられるべきだろう。

これらの点については、また稿を改めて検討を加えていく必要がある。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、堤正典神奈川大学国際日本学部教授には原稿の校閲の労を執っていただいた。御多忙を極める中拙稿に時間を割いていただいたことについて、記してここに改めて謝意を表したい。

文献

- Бондарко, А.В. *Грамматическая категория и контекст*, Ленинград, «Наука», Ленинградское отделение, 1971a.
- Бондарко, А.В. *Вид и время русского глагола: значение и употребление*, Москва, «Просвещение», 1971b.
- Бондарко, А.В. *Основы функциональной грамматики: языковая интерпретация идеи времени*. Санкт-Петербург, «Издательство С.-Петербургского университета», 1999.
- Бондарко, А.В. *Теория морфологических категорий и аспектологические исследования*. Москва, «Языки славянских культур», 2005.
- Бондарко, А.В. *Глагольные категории в системе функциональной грамматики*. 2-е изд. Москва, «Издательский Дом ЯСК»; «Языки славянской культуры», 2017.
- Бондарко, А.В. (ed.) *Теория функциональной грамматики: введение, аспектуальность, временная локализованность, таксис*. Ленинград, «Наука», Ленинградское отделение, 1987.
- Гловинская, М.Я. *Многозначность и синонимия в видо-временной системе русского глагола*. Москва, «Азбуковник»; «Русские словари», 2001.
- Зализняк, Анна А., Шмелев, А.Д. *Введение в русскую аспектологию*, Москва, «Языки русской культуры», 2000.
- Маслов, Ю.С. *Вид и лексическое значение глагола в современном русском литературном языке* // Изв. АН СССР, отд. лит. и яз., 1948, т. 7, вып. 4, с. 303-316.
- Маслов, Ю.С. *Избранные труды: аспектология; общее языкознание*. Москва, «Языки славянской культуры», 2004.
- Плунгян, В.А. *Введение в грамматическую семантику: грамматические значения и грамматические системы языков мира. Учебное пособие*.

- Москва, «Российский государственный гуманитарный университет», 2011.
- Рассудова, О.П. *Употребление видов глагола в русском языке*. Москва, «Изд-во Московского университета», 1968.
- Рассудова, О.П. *Употребление видов глагола в современном русском языке*. Изд. 2-е, испр. и доп. Москва, «Русский язык», 1982.
- Comrie, Bernard, *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems*, Cambridge, Cambridge University Press, 1976.
- Forsyth, J., *A grammar of aspect*, Cambridge, Cambridge University Press, 1970.
- 阿出川修嘉『ロシア語動詞の体の個別的意味とアスペクトの意味の対応 関係に関する再整理の試み』上智大学外国語学部紀要（第57号）、2022年、21～46頁。
- 堤正典『ロシア語動詞アスペクトにおける「個別的意味」と多義ネットワーク』、『神奈川大学言語研究』巻39、2017年、21～40頁。
- オー・ペー・ラスードヴァ（著）；磯谷孝（訳編）『ロシア語動詞：体の用法』吾妻書房、1975年。